

記憶指示とその周辺

—日本語と他言語の対照を通して—

仁科陽江（広島大学）

ynishina@hiroshima-u. ac. jp

【要約】

本研究は、日本語と他言語の指示詞の用法について、とくに記憶指示の表現に焦点を当てて比較対照する。多くの言語で遠称の指示詞が記憶指示機能を持つのに対し、英語やドイツ語の近称指示代名詞の記憶指示用法が、単に記憶内の指示対象を示すのみでなく、感情表出、評価、話題導入など、様々な付加的な意味機能を持ち、聞き手を取りこんだ談話の展開にも寄与していることを示す。

1. はじめに

日本語教育のために学習者の母語と対照研究を行うことが有益であるのは自明である。学習言語が、学習者の母語にない体系を持つ場合や学習言語と一対一で対応できない場合に、学習者は習得の困難さを感じ、負の転移による誤用の原因にもなる。たとえば音素の弁別性が低い音韻体系を持つ言語話者が誤解を生んでしまいやすいことは、構造的にたやすく説明できるであろう。そこでは学習者自身も、自分の発音が通じないのはどうしてか、音韻体系の対照による気づきを得ることは可能である。

しかし実際には、成功していない対照研究も多い。異なる言語を並べてその異同を提示することだけが対照研究の目的ではないし、構造上の対応関係が一見同じように見えて、実は異なる使い方をすることは往々にしてある。学習者のコソアの誤用が指摘されるのは、母語にそのような三分法的な指示詞のシステムがないことに起因する場合もあるが、母語との対応関係が同じように見えても実は用法の異なることを示している。

日本語の指示詞については、国内で比較的豊かな研究史があり、優れた論考も多いのであるが（研究史については金水・田窪 1992 参照）、外国語との対照という点では、管見の限りまだまだ不十分である。日本語の教科書の記述は、たいてい初級で指示詞の直示機能が導入されるが、照応や記憶指示の用法についてはまとまった記述が少なく、学習者の誤用が目立つ。

本論文では、日本語の指示詞を他言語と対照し、とくに英語やドイツ語の近称指示代名詞による記憶指示とその発展的用法を吟味する。日本語との異なりを示し、指示詞の多層的な機能について考察する。その上で、指示詞の持つおそらく言語を超えた普遍的な特徴についても言及する。

2. 指示詞の対照

指示体系は、大きく外部指示・内部指示に二分され、前者は眼前の対象を直接指し示す直示もしくは現場指示、後者は文脈の中の指示対象を示す照応もしくは文脈指示と呼ばれる。指示対象が先行していれば前方照応、後出するものは後方照応と呼ぶ。後者に記憶指示（もしくは観念指示、認識指示

など用語は複数あるが、基本的に指示対象は記憶の中にある。)を含む考え方と別に捉える考え方があ
る。

指示の表現形式として指示詞があり、表1、表2のように、二分あるいは三分される言語が多い。

表1：指示代名詞の二分法

	英語	ドイツ語	中国語
近称	this	dies-	zhè
非近称	that	jen-	nà

表2：指示代名詞の三分法

	日本語	タイ語	スペイン語	ドイツ語	英語
近称	kore/kono	nīi/nīi	est-	das hier	this
中称	sore/sono	nān/nān	es-	das da	that
遠称	are/ano	nōon/noon	aquiel-	das dort	yonder

直示の際の距離により、近いものを指す指示詞が近称、遠いものが遠称と呼ばれ、その間が中称となるが、たとえば日本語の場合は、距離の長さとは関係なく、近称が話し手の領域、中称が聞き手の領域、遠称がその両者から離れている場合を指す。これは基本的にそうなのであって、たとえば話者自身の体でも、視野に入っていなかったり誰かに触れられていたりすると、近称を使わないこともある。三分法をもつ日本語、タイ語、スペイン語は記憶指示に遠称を用いる点で共通する。一般的に記憶指示は遠称と相性が良さそうである。記憶の中の指示対象が、遠くに存在するというメタファーが多くの言語にあるのかもしれない。このように一見すると、多くの言語で一対一に対応するように見えるのであるが、細かい用法になると違いが発見できるもので、個別言語の記述からどのように体系的に言語を比較していくかは方法論的な課題であろう。

ドイツ語や英語では場所を表す直示については三分する対立を表現できるが、記憶指示を表すのは二分法で、中国語と同様、原則的にやはり遠称を用いる。ただし、ドイツ語の jen- は今日ほとんど生産的には用いられず、かろうじて記憶指示用法が使われているが、近称の使用が多くなりつつある。それについては、第3節で述べる。

記憶指示を表す独立した形式を持つ言語もある(表3)。元来、直示とも照応とも機能的に異なるものなので、驚くに当たらないが、実際にこのようなシステムを持つ言語を筆者は他に知らない。記憶指示を遠称が受け持つのは一種の経済原理かもしれない。

表3：Nunggubuyu 語の指示詞の語根 (Himmelmann 1997:63)

	#__	前綴り-__
近称	ya:-	-a:-
中称	da-	-da-
遠称	yuwa:-	-uwa:-
記憶指示	ba-	-uba-

なお、ここでは指示代名詞のみを扱ったが、表4、表5のように、指示形容詞や指示副詞などもある。日本語はコソア体系で全体をカバーするが、ドイツ語で性質は *solch*、様態は *so* に相当する (König & Nishina 2015:7f)。定性を表す限定詞としてドイツ語には指示代名詞のほか、定冠詞 *der* があり、日本語を含めた冠詞を持たない言語は指示詞で定性を表すことができる。

表4：日本語の指示詞

	定性	個体	場所	方向	様態	性質
近称	kono	kore	koko	kotti	koo	konna
中称	sono	sore	soko	sotti	soo	sonna
遠称	ano	are	asoko	atti	aa	anna

表5：ドイツ語の指示詞

	定性	個体	場所	方向	様態	性質
近称	d(ies)er	der hier	hier	-hin	so	so, solch
遠称	(jener), d(ies)er	der da	da/dort	-her	so	

ドイツ語の定冠詞は指示代名詞から派生したとも言われ、現代のドイツ語で定冠詞にアクセントをつけると指示代名詞のような働きもする。指示詞が定性を表す定冠詞と同等の機能を持つのであれば、指示詞は定の指示対象を指示するといえる。

しかし、実際には不定をあらわす指示代名詞の用法があることを第4節に示す。

3. 記憶指示と近称

日本語でもそうであるように、記憶指示は、Nunggubuyu 語のように記憶指示のための特定の形式を持たない限り、遠称で表すのが一般的ともみてとれるが、実際にはそうでもない。ドイツ語では遠称の使用が激減したために近称に代えているとも考えられるが、遠称が健在の英語でも記憶指示を近称であらわすことが多い。特徴的なのは、その際、何らかの付随的な意味が発生し、さらなる用法が見出されることである。以下の例では、記憶指示に様々な意味が付加されていることがわかる。

まず、記憶により会話文脈に新しく出現する例である。

(1) Hast Du übrigens noch **dieses** Zimmer im Steingartenweg?

「ところでまだ Steingartenweg 通りのあの部屋に住んでるの？」

Übrigens 「ところで」とあるように、この Zimmer 「部屋」は、ここで初めて導入された指示対象である。話し手が自分の記憶から取り出した「部屋」は、聞き手の住んでいた部屋であるから、指示対象の情報は共有している。それでもその情報を強化するような前置詞句 im Steingartenweg 「Steingartenweg 通りに」が指示対象の名詞を修飾している。このように指示対象を同定しやすくす

る修飾部分を共起させるのは、記憶指示に特徴的な構造である。実際に、名前が思い出せないときに関係節で情報を付加して、会話の相手に助けてもらうという会話データも報告されている (Fox 1996:462)。

この場合に、日本語で近称「この」は使えない。

次の例は、指示対象に対する話者の記憶が、評価として現れる場合である。

(2) あのブラジルが負けた。

この指示詞はなくてもブラジルが負けたことを伝えられるが、話者の内面ではブラジルは強いナショナルチームであるという記憶による前提があり、遠称を用いることで、その強いチームが負けたことに対する驚きや意外性の意味を付与する。聞き手はたとえブラジルのチームについての記憶がない場合でも、話者の評価によって本来強いチームだということがわかり、指示対象を共有することになる。

日本語では記憶指示を表す遠称が用いられており、先行文脈がない限りこの意味で近称は使えない。

次の英語の例は同様に指示対象に対する話者の評価をこめて近称で表現している。

(3) She bought a pullover in **this** incredible green color. (= I recall the color and ask you to imagine it.) (Koenig & Lehmann 2014:14)

今、眼前にはないが、あるセーターについて語る時に、記憶にある緑色について、incredible「信じられない」と形容している。語彙の意味自体は中立であるが、ここでは、ひどい色だったとネガティブな評価を込めている。ここでは記憶指示であり、相手とその色のひどさを共有しているとも、あるいは、相手は指示対象を知らないともとれるが、後者の場合でも話者の評価を込めた指示詞の使用によって、指示対象を想像できる。

また、そこでは話者の感情の昂りも感じられ、記憶にまつわる感情も同時に表出される場合があり、軽蔑的に表出されるドイツ語の例も分析されている (Mikame 2016, Averintseva-Klisch 2016)。

このように、記憶から引き出した指示対象に対する、いわば話者の主観的関心を聞き手と共有しようとする場合に、指示詞の近称が用いられている。このことは、直示用法で距離の近さや話者の行動範囲を表すことと無関係でなく (Lyons 1983:285)、聞き手との心理的近さを達成し話者の領域に入れ込むことと関連するのだと考えてもよからう。

4. 指示詞と定性

記憶指示から展開したと思われる最後の例として、指示詞が不定の指示対象を導入する例を紹介する。

(4) A few years ago, there was **this** hippie, long-haired, slovenly. He confronted me... (Diessel 1999:109)

これは、数年前の記憶から指示対象 hippie を話者が取り出して近称 this をつけて話す例で、その意味では (1) と同様である。が、この例においては、聞き手は経験を共有せず、指示対象を同定でき

ない。ここでの指示対象は、There was で始まる構文機能から考えても、あきらかに不定である。指示対象の名詞句の後に、修飾句が並立されるが、ここでの描写は、聞き手による指示対象同定を促すものではない。

次の例に見られるように、ドイツ語でも同様に、主語である近称の名詞句が動詞の後になる語順で導入されている。

- (5) Da ist **dieses** Mädchen in meiner Klasse, sie hat... (Averintseva-Klisch 2016:128)
「私のクラスに**ある**女の子がいて、彼女は・・・」

このタイプの記憶指示は、日本語の遠称では言い換えられない。筆者訳では話者にだけ特定可能であることを表す不定の連体詞「ある」を用いたが、これは、記憶指示がベースになっていながら、上記の例(1)から(4)とは異なる種類のものであることを示唆する。

(1)と(5)の違いについては、日本語にはない冠詞に置き換えてテストすることで容易に違いが現れる。¹

- (1') Hast Du übrigens noch dieses / das / *ein Zimmer im Steingartenweg?
(5') Da ist dieses / *das / ein Mädchen in meiner Klasse, sie hat...

指示代名詞 dieses の(1')の記憶指示用法では、定冠詞 das に置き換えられるが、不定冠詞 ein は非文である。もしくは意味が変わる。(5')の不定用法では、定冠詞 das が非文となり、不定冠詞 ein で置き換えるのは問題がない。

不定を表す指示詞の使い方としては、日本語ではむしろ、「こういう女の子」「こんな女の子」と、話題を導入し、それについての記述が続くことを期待させるようなやり方が相当する。ここで近称が用いられるのは、日本語の場合は、英語やドイツ語のような記憶指示からの用法の広がりというより、情報は話者のみにあるという、距離の近さや話者の領域を表すという近称の機能に関連すると言える。いずれにせよ、“speaker has in mind” (von Heusinger 2011:9) を共通原理として、異なる方向に用法が展開していったものであると考えられる。

指示代名詞が不定を表し、置き換えられるのであれば、不定冠詞との違いは何か。一つには、前節で述べた話者の主観的な感情を付け加える意味的な広がりがある。が、ここで重要なのは、談話の中に聞き手を巻き込むこと (Lakoff 1974:347) ではないだろうか。指示代名詞は話者の感情を表し、聞き手の連帯を得て、その感情をシェアし親密さを育てる (Lakoff 1974)。そのような聞き手との繋がりが、聞き手の関心を喚起し、より良い談話を形成する準備となると考えられる。

また、ここではその存在に言及するのみにするが、さらなる選択肢として、ドイツ語話し言葉に出現する so' n という不定の指示代名詞がある。これは、対象でなく性質を指示する指示形容詞 solch と不定冠詞 ein の接語であり、不定の指示代名詞と並ぶ機能をもつ (von Heusinger 2011)。そのふるまいが上で述べた「こういう/こんな女の子」の「こういう/こんな」という日本語に酷似している。

¹ Deichsel (2015:3) はドイツ語近称 dies-の、直示、照応、記憶指示、不定という主な4つの用法について、冠詞との置き換えテストを行なっている。

ここでいう不定の機能は、意味論的な指示性 referentiality というより、談話の中での役割 discourse prominence (von Heusinger 2011) の問題といえよう。指示詞を用いることで、広い意味での後方照応のような指示機能を持ち、新しく導入された話題の談話内での位置づけやその後の進展を一層際立たせる。そのことはおそらく、前節で扱った、指示詞の表す評価や感情の表出と無関係ではないとも考えられる。

日本語の指示詞についても、このような観点からの記述がより多くなされれば、日本語文法に新たな光を投げると期待される。

5. おわりに

眼前のものを指し示すという行為は人間誰しもが行う根源的な行為であるが、それが言語化され文法化された体系は言語によって共通する部分もあれば相違する部分もある。本論文では、そのような体系のうち特に記憶指示の表現について、日本語と対照しつつ他の言語の特徴を紹介し、分析、考察を行った。

これまでの記述をまとめると、次のことが言える。

まず、記憶指示は常に遠称で表すわけではない。近称で表した記憶指示の用法を見ると、単に対象を指示するにとどまらず、評価、感情の表出、話題の導入など、様々に意味的な広がりを見せていることがわかった。

次に、指示詞の定性は常に定であるわけではない。そして、不定冠詞を用いずに指示代名詞を用いるところに、指示詞の談話における役割がある。

この結論を裏付けるドイツ語の用法は、ドイツ語の文法書の指示詞の項に記述されていないものがほとんどである。日本語だけを見てもわからなかったことでもある。ドイツ語で今日、ほぼ近称のみで表されているこれらの多層的な指示機能が、日本語で遠称と近称に使い分けられているところにも、対照研究の方法論を活用できる余地があるだろう。

母語で近称を用いるからといって、学習言語にそのまま転換すると、日本語で記憶指示の表現にはならない。そして、たとえ「記憶指示は日本語ではア系の遠称指示詞を用いる」と習ったところで、別の言語において記憶指示から派生していく意味全てをカバーできるわけではないこともわかった。記憶指示の周辺機能として、今回扱った以外にも、まだ他にも考慮しなければならない要素があるのではないかと思うが、それは今後の課題とする。

言語現象を分析、考察していく中で、どうしてこのような使い方をするのか、ということ考えた時、話者が意識するとしないとにかかわらず、そこにはより良い談話を形成するための原理が働いていることがわかる。それは個別言語を超えた人間の普遍的な営みであるともいえよう。

参考文献

金水敏・田窪行則 (1992) 「指示詞」 金水敏・田窪行則 (編) 『日本語研究資料集 第1期第7巻』 ひつじ書房

Averintseva-Klisch, M. (2016) Pejorative Demonstratives. In R. Finkbeiner & J. Meibauer & H. Wiese (eds.), *Pejoration*. Amsterdam: John Benjamins. pp.119-141.

Blackwell, S. E. (2003) *Implicatures in Discourse: The Case of Spanish NP Anaphora*. Amsterdam: John Benjamins.

- Deichsel, A. (2015) The Semantics and Pragmatics of the Indefinite Demonstrative *dieser* in German. SinSpeC. Working Paper of the SFB 732 "Incremental Specification in Context" Stuttgart. Dissertation.
- Diessel, H. (1999) Demonstratives: Form, Function and Grammaticalization. Amsterdam: John Benjamins.
- Fox, B. A. (1996) Studies in Anaphora. Amsterdam: J. Benjamins.
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976) Cohesion in English. London: Longman.
- Himmelman, N. (1996) Demonstratives in Narrative Discourse: A Taxonomy of Universal Uses. In B. Fox (ed.), Studies in Anaphora. Amsterdam: John Benjamins. pp. 205-254.
- Himmelman, N. (1997) Deiktikon, Artikel, Nominalphrase. Zur Emergenz syntaktischer Struktur. Tübingen: Niemeyer.
- Iwasaki, S. & Ingkaphirom, P. (2005) A Reference Grammar of Thai. Cambridge: Cambridge University Press.
- König, T. & Lehmann, C. (2014) Reference: Communicative Functions and Operations. MS
- König, E. & Nishina, Y. (2015) Deixis. Der Art und Weise, der Qualität und des Grades im Deutschen und Japanischen: Eine kontrastiv vergleichende Analyse. In Y. Nishina (ed.), Sprachwissenschaft des Japanischen (Linguistische Bericht, Sonderheft 20). Hamburg: Buske. pp. 7-31.
- Lakoff, R. (1974) Remarks on 'this' and 'that'. Proceedings of the Chicago Linguistics Society 10, 345-356.
- Lyons, J. (1983) Semantik: Band II. München: C.H.Beck.
- Mikame, H. (2016) Psychische Perspektivität in der deutschen Sprache. Eine kognitiv- linguistische Untersuchung. Hamburg: Buske.
- Nishina, Y. (2018) Anamnestic Referenz. Kontrastiv-typologische Studie des Deutschen und des Japanischen. In Japanische Gesellschaft für Germanistik (ed.), Wortbildung und Pragmatik im Deutschen. München: Iudicium. pp. 106-123.
- von Heusinger, K. (2011) Specificity, Referentiality and Discourse Prominence: German Indefinite Demonstratives. In I. Reich, et al. (eds.), Proceedings of Sinn & Bedeutung. Saarbrücken: Saarland University Press. pp. 9- 30.